

詩集

原子雲の下より

峠 三吉 山代巴編



青木文庫

青 木 文 庫

一九五三年九月一日第一版第一刷発行
一九八〇年三月十五日第一版第一六刷発行

原子雲の下より

定価は帯・カバーに表示

著 者

峠 三 吉
山 代 巴

発行者

山 根 襄
東京都千代田区神田神保町一ノ六〇

発 行 所

東京都千代田区
神田神保町一ノ六〇

株式
会社

青 木 書 店

電話東京二九二局〇四八一(代)
振替・東京八一三六五八二番

郵便番号 一〇一

*落丁本・乱丁本はお取替えします

(分)0192 (製)8188 (出)0015

青 木 文 庫

— 62 —

詩 集

原 子 雲 の 下 よ り

青 木 書 店

序 文

1

一九四五年八月六日、午前八時一五分、アメリカ軍の手によって、広島に世界最初のウラニウム二三五爆弾が投下され、つづいて九日、長崎にブルトニウム爆弾が投下された。広島では二四万七〇〇〇の生命が奪われ、長崎では一五万前後の市民が殺された。

軍事的には、そのみで勝敗は決しうるような兵器ではないが、民衆の大量殺戮には適すると いわれる原子爆弾が、広島においてこのように典型的な効果をあげ得たのは何故であろうか。

それは可燃性の都市にたいする計画的な奇襲が、しかも非戦闘員の密集する地帯にたいして完全に行われたためである。

その年の春から夏にかけて、全国の都市が夜を日についで焼き払われ、敗戦の様相が日ましに濃くなってゆく状態の中で、理由の分らぬままに残される不安におびえていた広島も、八月五日の夜、いよいよ広島を焼き払うとのビラが撒かれたというので市民たちは、周辺の山や畑に逃れ、夜半、広島湾上空に侵入したB29の大編隊が、広島を襲うとみせかけ山口県光市の方へ飛び去ったのち、明け方、ほっと安堵しつつ家に帰り朝食を済し、出勤者や学校の生徒たち、隣組や近郊からの義勇隊など多数の人々が市の中心部に向って一日の行動を開始したとき、しかも一部の留守部隊が残っている兵営があるほかは、学校、官庁、病院、銀行、会社、教会、寺院、商店

街と住宅の密集した中心地帯にむけて、いきなりTNT二万トン爆弾より強力で、グランド・スラムの二千倍以上の爆破力といわれ、また、「太陽の力が源泉となる勢力」とアメリカ大統領が誇ったエネルギーが放射されたのである。

この衝撃のもとで市民はどのような悲慘に包まれただろうか。

爆心直下にあった郵便局では、ちょうど夜勤と日勤の交代時間にあたり古い煉瓦造りの建物に充滿していた約六〇〇の全局員が消滅し、七〇〇米東北方の練兵場で、その朝入隊するため集った中年の兵隊と、その見送りの家族は、そのまま炭化したり赤剥けになったりして散乱し、一〇〇〇米はなれた県庁では当日出勤者一二〇〇人中九〇〇人が即死、または建物の下敷きとなって焼死（残りのうち六〇％は八月二五日から九月五日までの間に原爆症で死亡）、一五〇〇米はなれた雑魚場町で先生に引卒され、作業についていた一中、二中、県女、市女、女学院、女子商業等の一、二年の生徒たちは、焼けた頭髮、剥がれた皮膚、めくられた唇に父母を呼び、教師らは肉の露出した肩にそれらを背負いつつやがて道のかたわらに、水槽の中に、収容所の筵の上に死んでいった。

またその頃、松根掘りに専念されていた百姓の中から組織され、同じく家屋疎開の作業に県下各地方から駆り出されていた義勇隊の多くは焰と火傷の苦しみに追われ、天満川、福島川に這い降り流されたりしく消息不明で、惨禍は投下者の計画とおそろ恐るべきものとなったのである。

これより先、同年二月、ドイツ降服後三カ月でソヴェートが参戦するときまったヤルタ会談が終了し、四月一日、アメリカ軍は沖繩に上陸、同五日、小磯内閣は退陣、同日モロトフ外相が、日ソ不可侵条約の不延期を通告して来た。

五月八日、ドイツはついに無条件降服したのだが、その前に第二戦線の形成をおくらせていた米、英が、スターリンググラードの戦いより急にソヴェート軍が反撃に転じたのをみると、無理おしにノルマンディーに上陸し、ベルリンの争奪戦が行われた状態の中で、日本の戦力も、早く飼いならしてつぎの相手に使用すべくねらわれていたことを国民は知るよしもなかった。

しかも日本の財閥と軍閥は、国民を本土決戦に追いやりながら、ひそかに横浜銀行スイス代表者にアメリカ実業団との交渉をさせ、天皇制を保持しつつ戦争を終る契機をつかもうとねらっていた。

六月二一日、沖縄での日本軍の組織的抵抗を終り、七月一六日、ニューメキシコで行われた世界最初の原子爆発。その翌日、ポツダム会議開催。二六日、同宣言発表。すでに八月八日にソヴェート同盟が対日宣戦布告をするのは明瞭であり、そうなればソヴェート軍がどれ位急速に日本の戦力をうちくどくかは十分予測される。

このような情勢の中で、アメリカの良心ある人々は「原爆を使用するなら、何故、連合国主権の実験でその偉力を示し、その基礎に立って日本に最後通牒を発し、責任の負担を日本人自身にゆだねなかったか……」(ノーマン・カズンズ、トーマス・K・フィンレター、一九四六・六・一五 土曜文学評論)と叫び、日本の子供たちが「何故、広島に落すんだ」(六年、久保克則)「わるいアメリカよ」(三年、豊島綱二)と責めても、「もし原爆投下の目的が、ロシアの参戦前に日本を叩きつぶすことにあるたとすれば……」(同前)そのようなことは時間的にも考えられなかったのである。

そしてまた、「アメリカ爆撃成果委員会」副会長ポール・ニッツの言明をP・M・S・ブラケットが要約したつぎの言葉をつけ加えれば、その間の経緯は明瞭であらう。「広島と長崎にいそ

いで爆弾が投下されたことは、その政治的な目的が十分に達せられたという意味では、一つの輝かしい成功であった。日本にたいするアメリカの管理は完璧なものであり、ロシアとの権力争いはそこにはない。」

こうして広島全市は、炎の海に包まれ、逃げのびた夥しい人々は市の近辺町村の学校、寺院、個人の家々に充満し、水を求め苦痛を訴える狂喚のうちに何処の誰とも分らぬまま死んでいった。しかし市の周辺にある、三菱造船、同重工、旭兵器、日本製鋼、東洋工業、油谷重工、等の軍需工場は殆んど被害を受けず——工員の九四％は健在——国鉄は三日間で機能を回復した。

ついで八月九日、ソヴェート軍の戦車隊が石井中将の細菌兵器根拠地、ハルピン郊外の第七三一部隊めがけて殺到していた朝、午前一一時に長崎の町はずれ、医科大学と養育院、天守堂のある上空へ原爆第二号が投下された。

そして一四日、日本はポツダム宣言を受諾し、終戦の詔勅が出された。権力者の号令するところに、火傷の膿と蛆の中に横たわりながら、少女までが「先生、日本は勝つわね……」と死のまぎわまで呼んでいた日本は、無条件降服した。

敗戦の責任を原爆に転嫁させようとする軍閥の意図は、天皇の「加之敵ハ新ニ残虐ナル爆弾ヲ使用シテ頻ニ無辜ヲ殺傷シ惨害ノ及フ所真ニ測ルヘカラサルニ至ル」という言葉にも見られるが、敗戦ときまるや直ちにその絶対的威力が宣伝され（「この威力、火薬の二万トンに匹敵」中国新聞 二〇・八・一五、「今後七〇年は棲めぬ」毎日新聞 二〇・八・二四）それはアメリカにひきつがれたが、そのような歴史の転換の中で生き残った市民は原爆症に襲われ、脱毛、発熱、下痢、嘔吐、内出血を起し、その年の冬へかけて再びつぎつぎと倒れていったのである。

しかし原爆の真の悲劇はこれから始ったといえるであらう。生き残るものは生き残り、生活のあい間に過去の事実は忍んで来たものの、日々に苦しい生活の闘いの中で各家庭、各個人の中にいよいよ深く滲透してくる原爆の苦悩は、これと直面せずに踏み越えることは出来ない。

それは、あの日の恐怖以来、痴呆状態となり、今でも夜中に泣き叫んで転げ廻る発作を起すという哲子ちゃん（丁小学校教師、西原氏のもう一つの作品）。健忘失語症の青年（中国新聞 二二・二・一一）。あるいは七年後の今でもつぎつぎと起っている原爆症（長田氏編「原爆の子」の中の伊藤久人君が今春死亡したのもその一例）。それに当時爆心地から二軒以内の婦人の体に老人または少女のような生理症状を起させた（朝日新聞 二一・一・二〇）放射能の作用が、科学者の説によると（ジュリアン・ハックスレー博士）遺伝的悪影響を今後長い年月にわたって与えるだろう、といわれるような肉体的苦痛と共に。下敷きのまま生きながら焼死させた肉身をもつ人々の心の疼きはともあれ、ケロイドの体で、婚期に入った娘たちや、それにつながる家庭。同じく肉体的な障碍のために絶えず圧迫される子供たち、寡婦の再婚または離縁とその子供の問題、孤児や、全滅した家庭の遺産から起る問題、それらが複雑に入り混ったかたちで多くの人々にかぶさり、その下で特にケロイドを持った人々は、冬は底深い痛みに、夏は針でかきむしらずには居れぬ程の痒みに耐えながらじっとそれをしのいでいる精神的な悲惨さはどうであらうか。

それは今もこの世界に製造が続行され、その効果を更に大ならしめるための実験がくり返されている原子爆弾というものによる不幸であるため更に深く、それを使用した国に占領され、その権力に服従させられて来た状態であるだけに救い難く暗いものである。

このような市民の陰鬱な状態のうえに、「原子爆弾の使用はアメリカ人、日本人の数十万――

おそらくは数百万の生命を救った……」(K・T・コムプトン博士)というような、あたかも原爆が平和のためにやむをえずに使われたものであるという偽瞞的な宣伝がなされた。(真宗の広島と、カトリックの長崎が選ばれたということは、そのために一層効果的であった。)

片方C I Cの手により原爆の真相を発表することが永く禁止されたこととあいまって、広島の平和の声は、市民の心情とは無縁の方向へ、ブラック建の平和塔の前で鐘を鳴らし花火を打ちあげ、ミス・ヒロシマが長崎の土をはらはらとふりかけたりする式典や、孤児から生れた五人の少年僧が喧伝されるような、あるいは孤児の可愛いのを選んでアメリカ人が金を送って養育する「精神養子」というようなものが新聞に書きたてられる方向へむけられてゆき、それも、ソヴェートの原爆所有が明かにされ、朝鮮戦争がぼつ発してからは、水素爆弾製造のニュースや戦術的原子兵器の実験という威嚇と共に「平和をもたらした原爆」の宣伝は産業奨励館のドームをとり毀し、原爆第一号といわれるK氏のケロイドの体を病院から追放して、広島の廃墟と魂の傷痕を緑の芝生と植民地的文化によって埋めつくそうとする方向へ変って来た。そしてその頂点が一九五〇年の八月六日、爆心地と似の島の供養塔における読経以外、一切の市民の集会を、武装警官をもって禁止させるという事態によって示されたのである。

原爆投下の意味するものが、日本の敗戦をつうじてこのように展開される中で、広島市民の生活のすみずみにまでしみこんだ原爆の惨苦の中からにじみ出る平和への願いは、決して絶えることなく、それはA・B・C・C(原爆傷害調査委員会)で写真にとられる火傷の娘が、自分の醜い顔と共に、溢れる涙を世界に伝えてくれ、という叫びとなり、「原爆の子友の会」の子供たちが自分たちの手で治療をさせよう、という活動となり、直接障害者たちの「アメリカに賠償を要

求せよ」(朝日新聞 二七・六・二九)との声となってようやく表面にあらわれつつあり、八月六日の記念日も昨年のように、朝鮮で戦争中のパイロットが列席する官製式典と、かぎられた組合による会合と、警官と対峙しながら開かれる民衆の大会とに分れたかたちから、今年は戦争と原爆に反対し世界の良心に呼びかける全市民の大会が、連日の新聞が周辺町村からの死体発掘を報ずる中で(二葉の里、七二体。坂町、二一九体。戸坂村、五五〇体)持たれようとするところまで進み、原爆の子供たちの組織や、原爆被害者擁護会などの市民の生活に根をおいた活動が地熱のように起されつつあり、この詩集編纂の運動もそれらの力の一環として、原爆の意味するものと、広島の子供たちや市民の平和を願う真実の声を、日本全国、あるいは全世界の人々に向けて打ち出すためになされたのである。

2

文 序

「原爆の詩編纂委員会」はこの詩集の中に、広島の子供たちの原爆の事実に立脚した、何者にも歪まされない卒直な叫びを中心に、戦後七年、生活のすみずみにまで滲透した原爆の悲劇の中から起ち上る市民の、平和への願いを盛るべく、五月二八日、広島各文学団体に所属する(新日本文学会広島支部、人民文学広島友の会、われらの詩の会、広島文学協会、エスポワール文化サークル、広島大学、詩グループ等)メンバーにより結成され、編集顧問を設けて直ちに活動に入った。

詩の蒐集は、「日本平和憲法の行方さえ案ぜられるとき……原爆の真の姿を訴え……平和のために役立てる」という趣旨によって一カ月の期間にわたってなされた。

その間、委員は生活を放棄し、学生は、アルバイトをしながら市内の全学校や労組文化団体をはじめ、弁当を使うために立ち寄った商店の女主人まで書いてくれるという市民の熱意に支えられながら、一三八九篇の詩が集められた。

だが困難がないわけではなかった、最も著しい困難は特に大人の場合、気を許した相手でないとして決して原爆にたいする自分の気持をあらわさぬばかりか、客観的事実についてさえふれることを避けようとする動かし難い傾向であり、これは勤労者の場合特にはなはだしかった。

従ってそのような人々から原爆にたいする卒直な心情をひき出し、それを詩に書かせようとするためには幾度も足をはこぶ忍耐と、誠実な情熱を必要とした。ある者は身にケロイドを負いながら「原爆なんて大したことではない」と話をそらし、ある者は「死ぬる五分前にならねば本当のことはしゃべれない」という、これらの事は一体何を意味するか。それは原爆を語ることは戦争の不幸を語ることであり、戦争の不幸について語ることは勤め人であれば失職の危険をはらむことだということを意味し、にも拘わらず広島の人々は深い戦争への呪咀と、誰にも語れぬ原爆投下者、アメリカへの烈しい気持を秘めていることの証明であると考えぬわけにはゆかない。しかもこうした中で多数の市民よりの投稿があいつぎ、その中の四九%が女性であり、それも匿名を希望するものが多かったのである。

集められた作品を見ると予想通り、原爆に反対し平和をねがうものが全部であった。そしてそれをなお分類すると、当時の悲惨さをのみりたい、あるいはそれを通じて平和を叫ぶもの、現在の生活に立脚して原爆の悲惨さを表現したもの、迫りくる戦争の危機を感じそれに抵抗しているもの、等に大別され、少数ではあるが現在はまだ日本も独立して平和になったとらっているもの

のもあった。

そしてそれらを文学的立場から見ると概念的、類型的に流れているもの、生活の具体性をもって表現しているもの、生活の中からはいえないが鋭い洞察力をもって原爆や戦争の本質をえぐり出しているもの等に分けることが出来た。

選衡に当たっての規準は、原爆の事実を明確に表現したもの、そして読者に感動を与えうるもの、でなければならず、当時の悲劇と、それが生活のすみずみに滲透して来た現実を描き、市民のかくれた平和への願いを表現して共感を与えるためには、出来るだけ生活の中からのうたごえ、であることを必要とした。またそれによって悲劇の多面性、概念や主観、宣伝に歪められぬ真情を打ち出そうとしたのである。

当時の悲惨さのみをうたっているものとして、小学三年、金本湯水子。同四年、森広美恵子などの作品があり、その悲惨さに立って平和を叫ぶものに、中学二年、山代鈴子。高等学校、西田郁人。同、弓削道子などの作品があげられるが、これらはその具体性をもった表現と、それに立脚して叫ぶ平和が、感動をさそうものとして選に入れた。全体の傾向としてこの分野に大別出来るものが多く、特に小学児童の作品の八〇％はこの分野に入るのであるが、その多くが原爆の悲惨にたいする具体的な把握に欠け、低学年では教えられた記憶の歪みも手伝って、類型に陥り、従って平和への叫びも感動をあたえがたいものとなっていた。なお、児童の作品の中に良い内容をもちながら、明かに教師の指導と思われる童謡調のものがあり、また、大人のものにも七五調で書かれたものが数篇あって折角の内容を殺していたが、これは詩についての古い概念が一般は勿論、教師の中にも残っていることを示すもので、先にふれた、日本も独立して平和になった、

という種類のものと共に教育上の問題を提起しているものと思われる。

つぎに現在の生活に立脚して原爆の悲惨さを表現したものとして、親や先生や友人の肉体に遺された原爆の障害をみて、平和をねがい戦争への抗議を叫ぶ作品（小学二年、よこもとひろみ。同、角谷信子。同六年、岡本陽子など）、父親に死なれた自分や友人の家の生活苦をみて原爆の悲しみをいう作品（小学三年、岸上守国。同四年、池崎敏夫。同六年、円道正純など）あるいは死んだ父や兄弟への悲痛な気持を現したもの（小学五年、栗栖英雄。同、奥本清志。同、佐藤智子など）、長崎との関連においてうたっているもの（小学五年、岡野希臣。同四年、田羽多ユキ子）、広島に居なくても見聞によって具体的に表現しているもの（小学三年、宮宇地雅子。同五年、檜垣益美）があり、また顔に負傷したので会社をやめた姉を描いた坊ちゃん（小学四年、大倉洋子）という作品や、アメリカにたいする卒直な気持を現した作品（小学三年、豊島紘一、同五年、佐伯百合子）、子供ながら障害者としての悲痛な心情をうたったもの（小学四年、河合賢治。同六年、寺西邦雄）などは平和運動の重要な要素を示すものとしてとり上げる。

最後に、迫ってくる戦争の危期を感じそれに抵抗しているものとしては、小学三年、藤本雄三。同四年、松浦壮介。同五年、石田練。中学、原田治。などの作品があげられるが、一体に現実の具体的な表現に乏しく、この点でも子供たちが教育によって戦争か平和かの現実から目隠しされているような感じを受けた。

なお全作品を学年別に見ると、小学二年生（当時一、二才）では恐怖の記憶が大人に教えられたゆがみをもち、三年、四年（当時二——四才）でようやくそれが描かれると共に戦争反対の意志が次第につよく、五年、六年（当時四——六才）では原子力の平和的な利用の問題も出され、投

下したものにたいする抗議や、平和のためにつくしたいという声も出てくるが、再び迫ってくる戦争の危機をとりあげ、それを批判した作品が現れるのは中学以上で、これは高校、大学、一般とすすむに従って強い諷刺の形をとったり（大学、山崎俊一）、具体的な事実をとらえて形象化たりしている。

一般の部に入るとその殆んどが生活のすみずみにまで滲透した原爆の苦悩から湧き出る声であり、戦争への危機にたいする強い反撓をもった作品であったが、それから内容が重複しているもの、形式にしばられて感動性を失ったもの、技巧にとられ内容の乏しいもの、観念的な言葉だけの作品、またあまり長すぎるもの、等を取りのぞくところに集録した作品が残った。

これらの中には、ケロイドの女性たちの「みせものになるのはいやだ」、「ああ何故生きたのだろう……だが世の中が受け入れてくれるか……」（尾形静子、M・K）という痛切な嘆き、親が帰らぬ子を思い、子が奪われた母をしのぶ悲痛な声（松田正美、山本美恵子）に満ち、そのほか選にもれたものにも多い未亡人の生活問題（正田篠枝、山口かず子、野川正己）と共に今後の生活に密着した平和運動の方向の一端を示すものと思われる。

また、文学の立場からの問題としてふれておきたいことは、かならずしも生活の中からのうたごえ、とはいえぬが、原爆や戦争の本質にたいする鋭い洞察からくるすぐれた作品が二、三あり（小学四年、政池良子。同五年、榎田としこ）その要素が子供や詩を初めて書いた人々に多く、その反対に積極的なテーマをうたいながら抽象に陥り説得力を持たぬ作品が、詩を書き慣れた人の方にかかったということであり、これは今迄の運動のあり方とからんで、今後の詩の方法にたいする鋭い示唆を与えている。

こうしてわれわれはこの詩集に、投稿者全体の気持を反映させ、子供から大人を含め生活のすみずみに滲透した原爆の苦悩の中からのいつわらぬ平和への叫びを盛るよう努めた。

この中に鳴りひびいている声は、永い戦争の圧迫と、七年間の偽瞞にもまぎらわされず、あの炎と血と涙のしみついた体からじかに生れ出たものであり、原爆がどのような意志により誰の上に落され、それが歴史上どのような意味をもつか、それにたいしわれわれはどうすべきか、ということを深く体得した声である。戦争をしかけた者が罰せられねばならぬ以上、原爆投下をもくろみ、あらゆる悲慘を承知の上でこれを実行したものはかならずとも罰せられねばなるまい。流された丘はつぐなわれねばならぬ、灼きついた涙は拭くべきだ。この詩集がそのために大きな稔りを持つよう地下の人々と共に祈りたい。

一九五二・八・三

峠 三 吉

詩集 原子雲の下より

——広島の人々の平和のうたごえ——